

氏 名	さ さ き まさ あき 佐々木 正 昭
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 100 号
学位授与の日付	平 成 14 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	生徒指導の根本問題——新しい精神主義に基づく学校共同体の構築——

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 崎 高 哉 教 授 田 中 耕 治 助 教 授 鈴 木 晶 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、今日、生徒指導上の「問題行動」(問題状態を含む)が増加し、かつ多様化・広域化・低年齢化している現状に鑑み、子どもの問題行動を生起させている原因とそれに対する対応策を検討するとともに、学校を、家庭と協力して親和的な地域復興の基盤となるような「共同体」として再編する方途を探ろうとする試みである。本論文は、「はじめに」と6部14章から成る本論、それに「おわりに」によって構成され、400字詰原稿用紙に換算して800枚を超える力作である。

「はじめに」において、論者は、少年犯罪や生徒指導上の問題行動の根底には子どもの孤立感・孤独感、自己の存在意義の欠如があり、子どもの存在の基軸を揺るがしている、子どもに自己を支える基軸を得させるためには、自己の能力や意志を強める努力を促すとともに、子どもの所属集団を自己と他者への信頼並びに状況への信頼を生み出すような共同体として再編しなければならないと述べている。

第1部「生徒指導上の問題行動と現代教育の個人的課題」では、生徒指導上の問題行動について生徒理解の立場から考察するとともに、問題行動を通して明らかになる現代教育の課題について論じている。第1章で、論者は、まず生徒指導上の問題行動と問題化傾向の実態把握に努め、次に、問題行動の発生と回避の総合的モデルを独自に作成して、問題行動の発生と回避のメカニズムを探っている。そして、問題行動を抑制・阻止するために必要な方策を明らかにしている。第2章では、現代教育の最重要課題として子どもの「いのち」を輝かせることが挙げられ、まず、個人的レベルでの「いのち」の輝きの支援として、子どもが自立するために必要な具体的能力・技能と心の安定の獲得に不可欠の課題が検討される。次いで、自立は人間にとって重要な事柄ではあるが、絶対的な自立はあり得ないがゆえに、個人の限界と人間としての限界の自覚に基づく相互扶助の精神が必要であることが説かれる。

第2部「教育的日常の再構築」においては、論者は、子どもの「いのち」を輝かせるために必要な基本的事柄として「愛」と「ほめ」「叱る」ことの復権を提唱し、そうすることが「教育的日常の再構築」につながると説いている。第1章では、愛は教育の契機であり、基礎であるが、今日、弱体化したり、歪んだりしており、その復権のために、人間存在にとっての愛の意義や愛の本質を検討した上で、個々の愛を包む「大なる愛」を認識することの重要性が説かれる。第2章では、まず「ほめ」「叱る」ことの困難な現状を把握し、その後、人間の自然本性と「ほめ」「叱る」こととの関係を考察し、「ほめ」「叱る」行為が大人の子どもへの愛に基づく「呼び掛け」として教育的意義が大きいことを明らかにしている。

第3部「共同体としての学校の復興」では、人間と集団の関係が考察されるとともに、子どもにとって最も重要な集団である学校を共同体として復興させることの必要性が説かれる。第1章では、論者は、子どもの成長にとって人間関係、つまり広い意味での集団が欠くことのできないものであるのに、現在では子どもの集団が消滅しており、それが唯一残っているのが学校であることを指摘している。第2章では、共同体としての学校集団をどう形成すればよいかについて、個々具体的な事柄が提示されている。第3章では、論者は、各教科及び道徳と並ぶ現行教育課程の三本柱の一つでありながら軽視されがちな特別活動の意義について検討し、特別活動の活用如何が特色ある生き生きとした共同体としての学校構築の要になることを強調している。

第4部『『近代』日本の学校と今後の課題・展望』においては、「近代」日本の学校の歴史と現状を考察されるとともに、学校を共同体として再構築するための問題点が指摘される。第1章では、まず「近代」日本の学校の歴史が検討され、学校が経済性と均一性の原理に基づく近代国家をつくるための人為的、歴史的システムであったことが明らかにされる。次に、現代の学校の問題点として、子どもの二極分化、主体的学習の喪失、学習離れ、学校離れが挙げられ、その背景にあるものとして学校の地位の低下と相対化、価値の多様化、「近代」の精神的価値の負の要素の露呈などが指摘される。第2章では、学校を制度面から批判したイバン・伊利チ（Ivan Illich, 1926-）の思想が検討され、あまりに過剰に学校制度に依存し、学ぶことを学校に委ねてしまっている日本の現状に対する警告として、学校をともに生活する中で自然に教え合い学び合う関係が成立するような共同体として再構築することの重要性への示唆として意義深いと受け止められる。

第5部「現代の精神生活と教育」では、論者は、「近代」の学校成立の動機となった西欧「近代」の精神的価値とその影響を受けている「近代」日本の教育について考察している。第1章では、まず西欧「近代」とポスト・モダン論議を概観して、日本における「近代の超克」論議が西欧「近代」への憧憬と劣等感のアンビバレンツから成っていることが指摘され、次に、西欧「近代」の価値観の特徴とその限界と負の要素が明らかにされる。第2章では、「近代」日本を政治・経済上から三期に分け、現在は「国家の時代」「経済の時代」を経て「個人の時代」に入っていることが示唆され、個人の時代が「利己主義の時代」や「孤立主義の時代」にならないためにも、教育の目的は個性・創造性の育成や人間関係づくりや自然との触れ合いに重点が置かれる一方、政治・経済の広域化や穏やかな結合による「一つの世界」をめざす観点から、国際性の育成と大局的視野の育成が求められるべきであると提言される。

第6部「新しい精神主義の復興と学校再構築の方向」では、物質主義、刹那主義、享楽主義、利己主義、拝金主義、虚無主義を生じさせている西欧「近代」の精神的価値の負の要素を克服するために、個人としての限界並びに人間としての限界を認識して得られる超越の実感に立つ「新しい精神主義」の復興が提唱され（第1章）、その視点から、第2章では、今後の社会改革の課題が、第3章では、今後の学校の再構築の方向が論じられる。

「おわりに」において、論者は、本論文を執筆した主要な動機となった問題意識を6点にわたって整理し、本論文が辛く、困難な現実の中で、自立を妨げられ、孤立して孤独な叫びを上げている子どもとそのような子どものために、苦しくとも誠実な努力を重ねている教師への励ましと支援を目的としたものであることを表明している。

論文審査の結果の要旨

子どもの非行や暴力行為、いじめ、不登校等、生徒指導上の「問題行動」にどう対応するかが、学校教育の、また教育学の喫緊の課題と言われて久しい。近年、これらの問題行動の原因と対策に関する学校教育関係者はもとより、さまざまな学問分野の研究者の関心がとみに高まり、数多くの実践報告や著書・論文を生み出している。しかし、それらにおいて、問題行動の原因が子ども本人にあるとして、子どもへの叱責や処罰、ケアや治療の形での対応を勧めたり、その原因をもっぱら家庭や学校、あるいは地域社会や社会全体の風潮に求め、現実の問題行動への有効な対応策に欠けていたり、必ずしも十分な理論的体系化が進んでいるとはいいがたい一面がある。本論文は、こうした状況の中で、子どもの問題行動は本人だけの問題、つまり子どもの自立の遅れや意志の弱さ、理性の欠如にあるのみならず、子どもの置かれている現代の社会状況、特に西欧「近代」の強い影響下に国づくりをしてきた「近代」日本の精神生活の反映でもあると捉え、子どもの問題行動に有効・適切に対応するための理論的、実践的課題について総合的、体系的な考察を加えているところに第一の優れた学問的価値を有している。

本論文の第二の、しかも最も優れた実践的、学問的価値は、論者が、子どもの問題行動の根底に自己の存在の基軸を揺るがす孤立感・孤独感があり、子どもをこの孤立感・孤独感から救うには子どもの所属集団を「共同体」として再編する必要があるとし、その再編への具体的方途を提示するとともに、学校を望ましい共同体として再編するために、とりわけ「特別活動」の意義を強調することにある。より具体的に言えば、論者は、まず問題行動は現象であり、その背後に原因があるとすれば、現象を追いかけるだけではなく、原因の究明に努める必要があるとし、その原因として子どもの孤立感・孤独感を挙げ、子どもがこの孤立感・孤独感から脱却し、「いのち」を輝かせるためには、自ら自立するための具体的な能力・技能と心の安定を得るとともに、「相互扶助」の精神に立った他者の支え、集団と社会全体の支えを必要不可欠とすると説く。

論者は、次に、子どもの成長にとって集団のもつ意味は大きく、かつての地域社会における子ども集団が消滅した今日、学校における子ども集団の存在意義を力説し、学校においてこそ、子ども集団の形成と子ども集団を生かした活動が可能であり、それが地域社会における子ども集団の甦りに貢献すると述べる。学校及び学校内の諸集団を共同体に再編するための論者の基本的方針—①人間尊重の精神、②自己肯定感・自己価値感の育成、③自己存在感・自己効力感の育成、④集団の三つの力（教育力、激励力、治癒力）の活用、⑤開放性—とそれから導き出される具体的方針と方法は綿密を極め、本論文の核心を成す部分の一つである。

さらに、論者は、学校行事やクラブ・部活動などの特別活動が各教科や道徳と並ぶ教育課程の三本柱でありながら、受験偏重の学校では軽視され、また学校週5日制完全実施に際しては真っ先に削減の対象に挙げられるが、論者自身の行ったアンケート調査では、大学生にとって特別活動が小・中・高等学校におけるよい思い出の上位を占めることに留意し、特別活動の特徴やその教育的意義—例えば、①社会性の涵養、②思い出づくり、③自主性・自発性・自治能力・統率力・企画力・強い精神力の育成、④自他の発見、⑤協力・協調・協同の精神の養成と達成感や一体感による友情の形成、⑤職業選択につながる興味・関心の追求と性格の改变、⑦意見発表や表現力の涵養並びに自己統制力の育成、⑧異年齢集団活動の体験、⑨公民的資質の形成、⑩信に基づく日常性の構築など—により多く注目すべきことを提案する。これまで、特別活動に関する著書・論文には学習指導要領やその指導書を解説したものや実践例を羅列した「ハウ・ツウ」ものも多く、特別活動の理論的基礎づけにやや欠ける点があり、そのような欠陥を補うために本論文が寄与するところは決して小さくはない。また、論者によれば、孤立し孤独感を抱いている子どもにとって、特別活動は教科とは異なり、自らの興味・関心に基づく選択ができる「参加型」の活動であり、共通の目的を目指して上級生と下級生がともに力を合わせることができるので、主体性を発揮しつつ、人間関係の拡大・深化が図れ、無気力、無関心、無責任を克服でき、自己の育ちの実感を大切にしながら、学校が温かい雰囲気をもった共同体であることを実感できる場となるのである。ここに、論者が、共同体として学校の再生を図るために、特別活動の活用をこそ図るべきであると高潮するゆえんがある。

本論文の第三の学問的価値は、「近代」日本の学校の歴史と現状を、西欧「近代」の価値観—その代表的なものとして、論者は、①人間中心主義、②理性主義・合理主義、③自由と個人主義、④民主主義を挙げている—の影響を受けて、中央集権的国家の形成に励んだ日本の「近代化」の流れの中に置いて分析し、その問題点を的確に把握するとともに、「新しい精神主義」による社会と学校の再構築を図る方向が具体的に提案されているところにある。論者の言う「新しい精神主義」とは、西欧「近代」の人間中心主義や物質至上主義、科学至上主義とは対極に立ち、個人が自己の限界と人間としての限界を強く自覚しながら、「有限の思想に基づく超越の認識」をもち、謙虚に、誠実に、相互に助け合いつつ生きる生き方のことである。論者の提言は詳細にわたり、子どもと学校と社会をめぐる困難な諸問題の解決を求められている今日の教育改革に、とりわけ子どもと教師を励まし、支援する立場からの貴重な示唆を与える提言の一つとなるであろう。

本論文は、以上のように、実践的、学問的に高く評価できる点があるのではあるが、問題点もないわけではない。一つは、壮大な理論的基礎づけと実践的な提言との間、さらには実践的な提言と現実の子どもへの対応との間に齟齬や懸隔を感じさせる箇所が散見されることである。今一つ、概念規定にやや厳密さの欠けるものが一再ならず使われており、惜しまれる。さらに、論の展開が冗長に流れる感のある章がいくつか見られ、本文を注に回したり、削除したり、一工夫があっても良かったと思われる。

もちろん、これらの問題点は、論者によってすぐにでも解決され得るものであり、生徒指導と特別活動という教育学において本格的に論じられることの少なかった領域に新機軸を打ち出した本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成14年10月31日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。